活動報告

「学生が変える日本大学」４章
―「日本大学 学生FD CHAmmiT 2017」における取り組み―

坂本裕菜*[1),2)]，松永直樹[1),3)]，石田大悟[1),4)]，須佐史子[1),5)]，大村一希[1),6)]
池田和徳[1),7)]，齋藤剛熙[1),8)]，太田　翔[1),9)]

[1)]「日本大学 学生FD CHAmmiT 2017」学生スタッフ，[2)]日本大学生産工学部応用分子化学科3年，
[3)]日本大学法学部政治経済学科3年，[4)]日本大学国際関係学部国際総合政策学科3年，
[5)]日本大学通信教育部法律学科3年，[6)]日本大学文理学部地球科学科2年，[7)]日本大学芸術学部美術学科4年，
[8)]日本大学医学部医学科3年，[9)]日本大学商学部会計学科4年

本稿は，日本大学における「日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT 2017」の開催に至るまでの過程と開催後のアンケート結果から，学生スタッフの視点で今後の課題と展望を述べたものである。
「日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT」は，一般的な学生ＦＤイベントと異なり，様々な学部から成り立っている日本最大規模の総合大学だからこそ，その効果を大いに享受できる“日本大学独自の学生ＦＤサミット”と言える。第１回目の「日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT 2013」から今回で５回目を迎えた。本活動報告が，今後の日本大学の「学生ＦＤ活動」の更なる発展に寄与することを期待する。

キーワード：ＦＤ（Faculty Development），学生ＦＤ，「日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT 2017」

は じ め に

「日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT」（以下，「CHAmmiT」とする）とは，簡単に言えば，「学生ＦＤサミット」の「日本大学版」であると言うことができるが，十分な知識を持つ参加者など全国の各大学が一大学に集合して大々的に行われる「学生ＦＤサミット」とは毛色が異なる。「学生ＦＤサミット」は，全国の大学から参加者が集い，大学教育について語り合う場である。一方で「CHAmmiT」とはチャットとサミットをかけ合わせた造語であり，難しく堅苦しい印象のあるＦＤ，教育改善を教員・職員・学生で気軽に話し合おうというコンセプトが包括されている。今回で５回目を迎える「日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT 2017」（以下，「CHAmmiT 2017」とする）は過去５回の中で最多の200名の参加者（スタッフを除く）を記録した。今回の「CHAmmiT 2017」では今までの４回を踏まえ，さらに発展した企画を目指し開催した。

1 「CHAmmiT 2017」開催までの流れ

本節では，「CHAmmiT 2017」当日及び開催に至るまでの概要について，実施報告を述べる。

*E-mail: sakamoto.y0180@gmail.com
投稿：2018年1月22日　　受理：2018年2月13日

平成29年４月上旬から５月上旬に学生コアスタッフ８名が公募により選出され，７月上旬から活動を開始した。また，学生コアスタッフは，同時期に公募により選出または推薦された学生スタッフ28名と７月上旬に顔合わせを行い，10月中旬から本格的に協働し，企画･運営の準備を進めていった。12月上旬からは，ファシリテーター経験者であるという制限の下で募集されたファシリテーター６名も加わり，総勢42名で「CHAmmiT 2017」をつくりあげた。ファシリテーターとは，お菓子を食べながら気軽な雰囲気で一つのテーマに追及するしゃべり場を円滑に運営するために，司会やタイムキーパー，ムードメーカーなどを１人で担う重要かつ難しい役割である。「CHAmmiT 2017」直前からの参加ではファシリテーターの練習が十分に行えない為，公募にあたってはファシリテーター経験者という制約が設けられた。今回の学生コアスタッフは，８名中６名が前回の学生スタッフまたは学生コアスタッフであったが，学生スタッフの中にはＦＤについて十分な知識を持たずに参加した者が多かった。

「CHAmmiT 2017」では過去４回の「CHAmmiT」とは事前のミーティングにおいて大きく違う点がある。前回の「CHAmmiT」では学生コアスタッフミーティングを多数重ね，ある程度形ができてから学生スタッフも交えたミーティングを行っていた。しかし，今回は７月上旬の第１回目に学生コアスタッフ，学生スタッフが全員集まりミーティングが行われた。これは，学生スタッフがコアスタッフの考えや活動から離れてしまわないようにという意図があったように思う。学生スタッフは第１目のミーティングから次の参加まで約３カ月空いてしまうため，熱が冷めないよう配慮が必要であった。

また，人員確保のため，「CHAmmiT 2017」本番直前にファシリテーターを迎えた。これは経験者を募り，より「CHAmmiT 2017」を充実したものにするというねらいも込められている。

１－１　第１回学生スタッフミーティング（平成29年７月８日）

全スタッフが集まり，初めての顔合わせとなった第１回学生スタッフミーティングでは，自己紹介を兼ねたアイスブレイクの後，「CHAmmiT 2017」に向けた趣旨説明に加え，基本的な事前知識の説明を行った。ＦＤ活動や「CHAmmiT」についての説明は，前年度コアスタッフの学生と職員が行った。

概要の全体共有を終えた後，全スタッフで実際にしゃべり場を体験した。初めて経験するスタッフも多い中，積極的に意見交換をしている様子を垣間見ることができた。しゃべり場を通して，学生スタッフの交流を活発に行うことができ，教職員スタッフとのコミュニケーションの場にもなった。ファシリテーターの役割とは何か，「CHAmmiT」とは何かを全スタッフで学ぶことができた。

続いて，コアスタッフ内で「CHAmmiT」における役割分担を決定した：

「代表」１名

「総務」１名

「企画・運営担当」３名

「広報・資料担当」３名

上記の構成で組織を編成し，「CHAmmiT 2017」を牽引する。

コアスタッフは，一言ずつ決意表明を行い，期待に胸を躍らせながら第１回学生スタッフミーティングは終了した。

１－２　第１回学生コアスタッフミーティング（平成29年８月１日）

第１回学生コアスタッフミーティングは，当日の会場である日本大学生産工学部キャンパスで行った。以後のスケジュールについての確認を行い，使用予定の会場を見学した。

「CHAmmiT 2017」の目標とキャッチフレーズを決定するにあたって，学生コアスタッフはもちろんのこと，学生スタッフからの数多くの提案も参考にし，最終的に学生コアスタッフで目標を決定し，おおよその

キャッチフレーズ案を絞り込んだ。「CHAmmiT 2017」を開催する上での全体の目標として，「大学の入り口を見つめ直し，現行制度を活用して，大学生活における向上心を高める提案をする」という題材を元に，以後の企画の検討を行うこととした。

さらに，ポスターにどの情報を載せるか，どのキャラクターを載せるかなどを話し合い，ポスターデザインのイメージ案を決定した。

１－３　学生コアスタッフ企画検討合宿（平成 29 年８月 30 日・31 日）

日本大学軽井沢研修所にて，学生コアスタッフ企画検討合宿を行った。学生コアスタッフ･教員スタッフ･職員スタッフの三者の立場から意見を述べ，話し合いを行い，企画案を決定した。

第１回学生コアスタッフミーティングで決まった目標と，合宿を通して決まった企画内容として，一年生の立場から見た初年次教育の改善という観点から，以下の企画を決定した。

・キャッチフレーズ「ピカピカの一年生を創るための教職学改造計画」

・「日本大学ＦＤガイドブック Teaching Guide」に意見する「Re: Teaching Guide」の作成

これらを柱として企画案の検討を行い，以下のようなタイムスケジュールを作成した。

・オープニング

初年次教育とは何か，キャッチフレーズやテーマ，「CHAmmiT」とは何か，などを初めて「CHAmmiT」に参加する人たちへ分かりやすく説明することを心がける。

・アイスブレイク

学生・教員・職員が混在するグループを作り，立場に関係なく親睦を深めてもらうことを一番に考える。

・しゃべり場①～④

学生・教員・職員が混在したグループ，三者の立場ごとに分けたグループでのしゃべり場を交互に行い，各グループで「Re: Teaching Guide」を作成してもらいながら，様々な立場での意見の共有をはかる。

・エンディング

学生コアスタッフ内で，できあがった「Re: Teaching Guide」を参考に表彰を行う。

・懇親会

参加者・スタッフ全体の親睦を深めてもらう。

タイムスケジュール決定後，リーダーを除く学生コアスタッフの各役割担当の振り分けを行った。

「オープニング・エンディング班」２名

「しゃべり場班」２名

「資料班」２名

「広報班」１名

以後，学生スタッフを上記の班に分担し，当日までの準備を行う。

１－４　第２回学生コアスタッフミーティング（平成 29 年９月 30 日）

企画検討合宿において決定した企画案を企画・運営担当の学生コアスタッフが，パワーポイント資料にまとめ，コアスタッフ全員で共有し，「Re: Teaching Guide」のフォーマットの作成内容や，当日のタイムスケジュールの概要を決定した。また，9 月 1 日･2 日に金沢星稜大学にて行われた「学生ＦＤサミット 2017 夏」の活動報告を参加した学生コアスタッフ２名が他の学生コアスタッフに説明して，ファシリテーターの進行や，グループの盛り上がりがどれほど重要であるかを学生コアスタッフ間で共有し，「CHAmmiT 2017」で

行われるアイスブレイクやしゃべり場のグルーピングなどに今後生かせそうな部分について検討した。

日本大学では，全学部共通の初年次教育科目として，「自主創造の基礎」という授業科目があり，最大約16,000人の1年生が学部の垣根を越えて交流を持つことができる授業「日本大学ワールド・カフェ」（以下，ワールド・カフェとする）が行われている。光栄なことに，我々学生スタッフと職員が10月15日に日本大学工学部キャンパスで開催される「ワールド・カフェ」への参加が設定されており，その準備も兼ねた打ち合わせを行った。当日までの事前準備の確認，当日のスケジュール等を確認し，バスの車内で行う「CHAmmiT」本番でのテーマや，しゃべり場で作成する「Re: Teaching Guide」についての説明内容を検討した。

広報活動においては，Facebookに限らず，昨年完遂することができなかったTwitterでも広報を行うことにより，さらに「CHAmmiT」への興味関心を引くような働きかけをすることを目的とすることを決定した。

また，参加者の募集開始に関して，当初の予定であった9月下旬から10月中旬に変更になった。これは，学生コアスタッフ内での連携不足により予定のスケジュールとのずれが生じた結果であり，来年度以降の学生スタッフ組織においても思案すべき課題となるだろう。

1－5　第2回学生スタッフミーティング（平成29年10月15日）

このミーティングから学生スタッフも加わって本格的に活動を行った。ワールドカフェの会場となった工学部キャンパスに向かう車内にて，学生スタッフも交えて「学生FD」とは何か，「CHAmmiT」とは何かについて再度，夏合宿の資料を用いて学生スタッフ全員での共有をはかった。「日本大学FDガイドブックTeaching Guide」とは何か，我々が作成する「Re: Teaching Guide」とは何かを口頭で説明したが，テーマの難しさも相まって，完全な理解を得てもらうまでにはまだ説明を要する状況であった。その後，学生スタッフの当日までの役割分担及び班分けを行い，各班で責任者となっている学生コアスタッフが中心となり，各班で活動をするための準備を整えた。

「ワールド・カフェ」では，日本大学をテーマとして約4時間しゃべり場を行い，普段接する機会の少ない工学部の学生との交流から，「CHAmmiT」に近い雰囲気でのしゃべり場を経験することができ，大変貴重な機会となった。加えて，大半の参加者が1年生であったため，初年次教育について身近な問題点を直接把握することができ，企画案の本質についての検討が必要であるとの学生コアスタッフの意識共有に繋がった。

1－6　第3回学生スタッフミーティング（平成29年11月11日）

第2回ミーティングで決定した役割班別に作成した実施計画書を参考にしてミーティングを行った。コアスタッフは進捗状況を逐一確認できるように各班での情報共有がすぐに行える環境を作りミーティングを牽引した。

役割班別ミーティング終了後，各班での進捗状況を全スタッフで共有し，学生スタッフに組織全体を意識してもらえるよう働きかけた。「CHAmmiT 2017」では複雑な企画を準備していたため，企画に対する認識の統一はとくに難しい部分でもあるので念入りに確認をした。個人ではなく全体で協力し合いながら築きあげていくという一体感を全体に浸透させるためにも，事前に説明資料の修正を重ね，スタッフ全員で共有をはかった。

企画案を基に全スタッフでしゃべり場を実践し，時間配分やテーマの絞り方などの修正箇所について検討した。その後，コアスタッフを中心となって，しゃべり場のグループ名を全て駅名にし，グループ移動の際にはファシリテーターが駅名の書かれた切符を渡し，記載されている駅に移動してもらうという工夫を凝ら

したしゃべり場の企画内容を考案した。

１－７　第４回学生スタッフミーティング（平成 29 年 12 月２日）

このミーティングから，実際の会場となる生産工学部キャンパスに全スタッフが集結した。また，以後から初めてミーティングに参加するファシリテーターとの顔合わせを行い，企画の中心であるしゃべり場を通して作成する「Re: Teaching Guide」の内容を綿密に確認した。全スタッフで「CHAmmiT 2017」の全体像と当日の流れを共有し，企画・資料の最終確認と調整を行い，全学生スタッフの前日準備の役割配置や，生産工学部の施設確認をした上で，学生スタッフとしての本番当日の動きを検討した。

最後に，本番と同様のしゃべり場を行い，最終的なタイムスケジュールを調整した。

１－８　前日リハーサル・設営準備（平成 29 年 12 月 16 日）

役割班別に設営する場所を決め，それにならって全スタッフで使用教室の設営，アイスブレイクやしゃべり場で使用する備品の設置，懇親会会場の設営を行った。オープニング・エンディング班は当日の司会進行練習と会場設備の使用方法の確認を主に行った。これまでの学生スタッフミーティング欠席者のフォローのため，ファシリテーション研修を実施するなど，本番に備えた事前準備に徹底して取り組んだ。準備を終えた段階で，全スタッフで全会場を一巡し，翌日に向け，最終確認を行った。

ミーティング全体を通して気になった点は，司会進行の練習時間不足である。企画内容の決定にかなりの時間を要し，オープニング・エンディング班の進行にしわ寄せがいってしまい，進行練習の時間が圧倒的に足りなくなってしまった。企画に始まり，資料等すべてに遅れが生じたがゆえに，スケジュール全体に遅れが生じる結果となった。これは，何度も職員スタッフから注意を受けていたにもかかわらず，自分たちの認識の甘さから引き起こされた問題であり，学生スタッフの課題として，今後十分に対応していかなければならない。

１－９　CHAmmiT 2017　当日（平成 29 年 12 月 17 日）

当日学生スタッフは午前９時 30 分の受付開始に備え，全員午前９時に集合し点呼を行った。学生スタッフ（ファシリテーターも含む）の当日欠席はなかった。しかし，事前に欠席が分かっていた学生スタッフの補てんとして学生コアスタッフ４人が対応することとなった。午前９時に集合後，受付係は名簿などの確認を，ステージ係は使用するスライドなどの最終調整を，その他の学生スタッフは設営状況の確認を行った。

今回は東京薬科大学の職員・学生の方々がオブザーバーとして参加した。本学の学生ＦＤ活動に興味を持っていただけたこと，また一日を通して交流できたことは本学の参加者にも学内だけでは感じることができなかった大きな「気づき」を得る機会となったであろう。これから交流を密にし，互いの「学生ＦＤ活動」がさらに活性化するよう相乗効果が生まれることを期待したい。

当日は以下のタイムスケジュールで行われた。

10：30 ～ 11：15　オープニング　ムービー上映・司会進行

オープニングではまず日本大学学務部長松林肇氏からの開会の挨拶が行われた。その後，学生スタッフ代表坂本裕菜からの挨拶，「ＦＤ」，「学生ＦＤ」，「CHAmmiT」，「学生ＦＤサミット」の説明，「CHAmmiT2017」の企画説明を行った。今回の「CHAmmiT2017」では「日本大学ＦＤガイドブック Teaching Guide」を根本としているため，企画説明の際に全体に向けて説明を行った。また，しゃべり場間の移動において，切符

を使用したため，参加者が混乱しないよう説明を加えた。

11：25～12：10　アイスブレイク　1年生のときの失敗談トーク

アイスブレイクでは学部ごとに班を作り，昼食をとりながら自己紹介をし，「1年生の時の失敗談」について意見交換した。参加者には同学部に知り合いがいない者も多くいると考え，学部ごとの班編成にした。その結果，1年次のカリキュラムがほとんど同じもの同士での会話になったため，どの班も沈黙なく会話が弾んでいた。また，多くのファシリテーターが事前に学生スタッフで作成した「ファシリテーションマニュアル」を参考に行動することで，しゃべり場を円滑にスタートすることができた。参加者がオープニング，アイスブレイクを行っている裏で，当日の欠席者を踏まえ，一部班編成を組み直し，参加者のしゃべり場間の移動表を作成した。

12：20～13：10　しゃべり場①　初年次教育について　教職学別グループ

しゃべり場①では教員・職員・学生がそれぞれの班を作り，「1年生のときの授業でやってほしかったこと」などを最初のテーマとし，主に初年次教育の改善点について話し合った。学部混合の班であったため，学部による多少の違いはあったが，初年次教育科目はどの学部もほぼ共通であり，作成された模造紙を見る限り共感する点も多かったように感じる。しゃべり場①の時間が短かったために，十分に解決策を話し合えない班もあった。しかしファシリテーターの誘導もあり，後述のしゃべり場③へうまくつなげられていた。

13：20～13：50　しゃべり場②　初年次教育について　教職学混在グループ

しゃべり場②ではしゃべり場①で配布した切符をもとに移動し，教員・職員・学生混合班で，しゃべり場①での話し合いを共有した。共有の方法は「ワールド・カフェ」の方式のように，各班にホストなる駅長を残し，他の班からきた参加者（乗客）に自分の班での話し合いについて説明した。しゃべり場①のどの班も，必ず自分と違う立場の意見を得られるようにしゃべり場②でのメンバー編成を工夫した。そのため，当日欠席者などの関係から移動の際に適宜調整が必要だった。

14：00～15：00　しゃべり場③　グループで〇〇に伝えたい！の記入

しゃべり場③では，しゃべり場①の班に戻り，「Re: Teaching Guide」の作成の続きを行い完成させた。テーマは1つに絞らず出た案の中から複数選べる形式をとった。話が膨らみ60分という時間では足りない班もみられた。しかし，多くの班のファシリテーターが今までのミーティングでの練習や「ファシリテーションマニュアル」を参考に行動したため，ほぼ時間通りに「Re: Teaching Guide」を完成させることができた。作成された「Re: Teaching Guide」をファシリテーターが班員分コピーし，しゃべり場④での個人発表に備えた。時間に余裕がない班があることも考え，移動時間とは別にコピーの時間として，休憩時間を10分設けた。

15：20～15：50　しゃべり場④（個人発表）決意表明記入

しゃべり場②の班に戻り，それぞれの班で作成した「Re: Teaching Guide」を共有した。教員・職員・学生のそれぞれの立場で作成したため，参加者には大きな「気づき」があったといえる。作成された「Re: Teaching Guide」については第2章で分析を行う。また，「CHAmmiT2017」1日を通して得られた「気づき」から，今後の大学生活に対する決意表明を記入し，共有した。1日を通して感じたことを基にして書いた決意表明を共有したことで，さまざまな価値観や考えを知る良い機会になった。

16：00～16：50　エンディング　表彰　懇親会の実施

エンディングではまずgoogleフォームを利用したアンケートを行った。参加者はQRコードから事前に用意したgoogleフォームにアクセスし，アンケートに答えながらリアルタイムで結果をステージのスライドで確認した。前回まではアンケート行ったあと参加者には結果を開示していなかったが，参加者の目の前で結果が表示されることで，参加者にイベントに参加しているという意識がよりあたえられた。アンケート実施後，学生スタッフ代表の坂本裕菜がすべての「Re: Teaching Guide」から選んだ，4つの班（学生班３つ，教員班１つ）を表彰した。その後，参加者から感想を述べる時間を設け，「他学部の方と話すいい機会となった」「教員の方の教え方について深く考えることができて面白かった」などという意見が得られた。参加者全員に小さくても何か「気づき」があったと願いたい。

その後，全学ＦＤ委員会プログラムワーキンググループ・歯学部教授の米山隆之教授に講評を，副学長の落合実学生産工学部長にご挨拶いただき，学生スタッフ代表坂本裕菜からの挨拶，記念撮影を行い「CHAmmiT2017」は閉会した。

その後，懇親会を行った。懇親会では１日を通して作成した前半の「Re: Teaching Guide」を掲示し，掲示された「Re: Teaching Guide」を比較しながら「CHAmmiT2017」を振り返り，談笑した。

以上のように，当日は学生・教職員スタッフ及び参加者の協力のもと大過なく閉幕することができた。

２　参加者の制作物の分析

本節では「CHAmmiT 2017」の参加者の制作物である「Re: Teaching Guide」を分析する。教員，職員，学生のそれぞれの班で作成された「Re: Teaching Guide」には下記のような特徴があった。

まず初めに作成されたティーチングガイドを教員，職員，学生の３つのグループに分け，出された意見を内容別にカテゴリ化し，表にまとめた結果が以下になる。

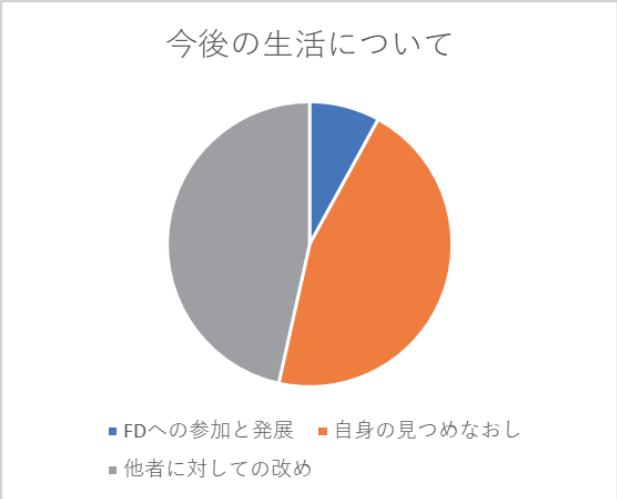
	学生	教員	職員
上下関係の向上	15	0	2
授業の改善	13	4	1
シラバス	11	2	2
学教職の関係向上	9	0	2
設備	3	0	0
評価	3	1	0
フィードバック	1	1	0
その他	3	2	0

上記より学生・教員・職員の意識の違いがみられる。特に顕著に結果が出たのは教員が授業の改善ということを大きく取り上げていることである。この件に関して大きく違いが出たのは教員が身近なものから改善してみようという意識からではないかと考えられる。学生・教員・職員の関係に関して，教員と比べると学生は交流が足りていないと感じている。また，職員からもこの点に関しては問題と考えていると推察できる。シラバスに関しては学生・教員・職員全てにおいて重要視しているように見られ，この点に関しては今後さらなる向上を目指すべきだと感じた。最後にそのほかの意見として教員からは「笑顔を増やしイメージの向上を目指す」学生からは「僕たち自身も変わらないといけない」というような意見や「CHAmmiTのよう

な日大生が交流するイベントを増やしていきたい」といった今回の「CHAmmiT」に前向きな意見も見られた。

次に「ReTeachingGuide」の完成後，これをもとに参加者全員に今後の生活に生かせるよう決意表明を書いてもらった。「FDを向上させたい」，「他者に対しての意識の改善」，「自分自身の意識の改善」という3つに分け集計したものになる。

今後の生活について	
FDへの参加と発展	16
自身の見つめなおし	91
他者に対しての改め	93



これに関しては2つの意見がとても拮抗しているように見えるが資料をまとめる際，教職員は主に学生に対して「支援を頑張っていきたい」や「学生への対応をもっと改めたい」という意見が多いように感じられた。対して学生は「向上心を持つ」や「サポートしたくなるような学生になりたい」といった前者の意見に答えるものが多く見られた。また，「先輩や後輩と関わり，もっとアドバイスをしたい（されたい）」という他者への対応についての意見が多く見られた。また，FDを今後さらに良くしていきたいという意見も見られた。

最後に決意表明から分析していく中で，学生・教員・職員がもっと歩み寄っていくことも大切であるが，自分たちからもムーブメントを起こしていこうというとても前向きな意見がみられたことがとても印象的であった。また，教職員の心情変化としても学生にもっと歩み寄っていこうという結果がみられた。この結果より，本会において大いなる成果を獲得できたと解釈できる。

3　参加者アンケート分析

本節では，本学におけるすべての学部等からスタッフを含め学生169名・教員34名・職員24名，東京薬科大学の方々15名，合計238名が参加し，206名（87.4%）から回答いただいたアンケート結果をもとに「CHAmmiT 2017」について参加者の視点から考察する。

まず，以下の2つの質問から「FD」，「学生FD」の認知度について考察する。

1．今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

CHAmmiT2013	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	21	25.3%	62	74.7%
教職員	32	94.1%	2	5.9%
全体	53	45.3%	64	54.7%

CHAmmiT2014	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	31	25.0%	93	75.0%
教職員	49	98.0%	1	2.0%
全体	80	46.5%	92	53.5%

CHAmmiT2015	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	24	23.5%	78	76.5%
教職員	46	97.9%	1	2.1%
全体	70	48.6%	74	51.4%

CHAmmiT2016	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	45	35.7%	81	64.3%
教職員	49	94.2%	3	5.8%
全体	94	52.8%	84	47.2%

CHAmmiT2017	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	53	33.8%	104	66.2%
教職員	48	94.1%	3	5.9%
全体	101	48.6%	107	51.4%

2．今回のイベント以前に「学生FD」について知っていましたか？

CHAmmiT2013	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	16	19.3%	67	80.7%
教職員	22	64.7%	12	35.3%
全体	38	32.5%	79	67.5%

CHAmmiT2014	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	29	23.8%	93	76.2%
教職員	40	80.0%	10	20.0%
全体	69	40.1%	103	59.9%

CHAmmiT2015	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	19	19.6%	78	80.4%
教職員	38	80.9%	9	19.1%
全体	57	39.6%	87	60.4%

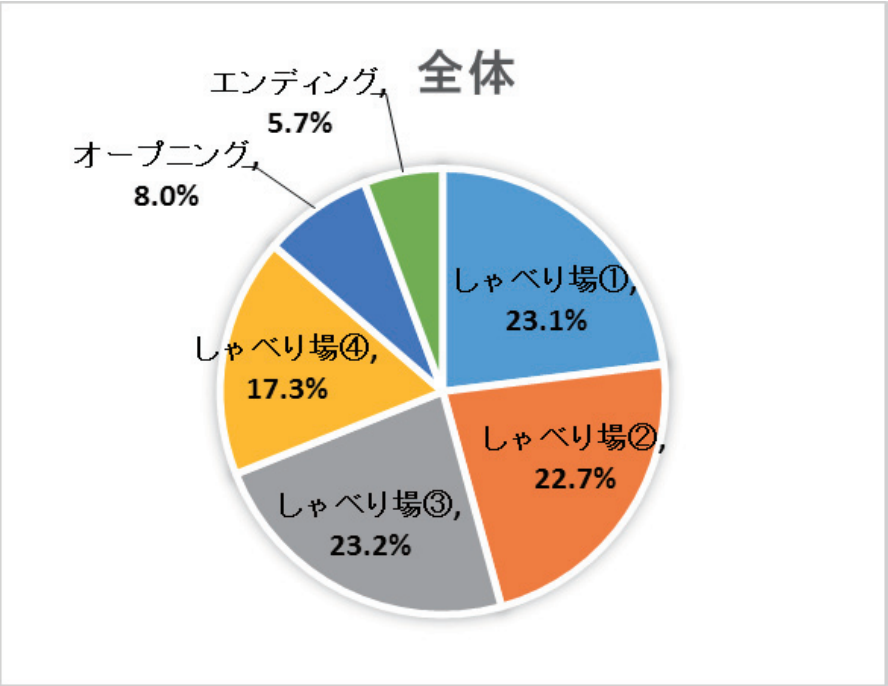
CHAmmiT2016	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	44	34.9%	82	65.1%
教職員	47	90.4%	5	9.6%
全体	91	51.1%	87	48.9%

CHAmmiT2017	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	57	36.3%	100	63.7%
教職員	47	92.2%	4	7.8%
全体	104	50.0%	104	50.0%

上表「FD」と「学生FD」の認知度について，過去のCHAmmiTアンケート結果と比較したものである。2016年までは認知度は上昇していたが，今回は「FD」の認知度は減少し，「学生FD」の認知度はほぼ変わらなかった。これは「CHAmmiT」開催によりある程度のところまで認知度はあがったものの，その後の伸びがなかったことを意味しており，従来の方法での宣伝ではまだ弱く，別の方法を模索する必要がある。ポスターの掲示は学部ごとにゆだねられているため，学部によって掲示枚数や掲示方法に大きな違いが生じている。全学部で同様に効果的にポスターを使用してもらえるよう働きかける必要がある。また，SNSでの宣伝は，時代の流れに合わせ写真や動画などを多用し，視覚や聴覚的に伝える方法を模索する必要がある。

次に「CHAmmiT 2017」の企画について参加者の視点から考察する。

３．本日のイベントで有意義であったプログラムはどれですか？（複数回答可）



上記の結果からも分かるように，しゃべり場①（23.1%），しゃべり場②（22.7%），しゃべり場③（23.2%）が多く回答されていた。今回はしゃべり場①としゃべり場③を学生・教員・職員で分けたため，初めての参加者には特に負担になるかと予想したが，しゃべり場①としゃべり場③のときに会場を見て回った際に，学

生同士など同じ立場の方が盛り上がる話も多いという意見もその場でいただき，沈黙が少ない班がほとんどであったように感じた。また，しゃべり場②においても，しゃべり場①で学生同士で話すことができたため，緊張せず教職員と話せたといった意見もその場で得ることができた。教職学混合の班でのしゃべり場を今までの「CHAmmiT」では強く意識していたが，同じ立場同士の方が特に学生は，抵抗なく「FD」「学生FD」について考え話し合うことができると思料する。また，メインである「Re: Teaching Guide」の作成部分（しゃべり場①としゃべり場③）に票が多く集まったため，今回の意図がうまく反映された形となったと考えられる。今後の「CHAmmiT」においても，各企画の目的をうまく伝えられるようなスケジュールを意識しなければならない。

4　学生コアスタッフ 「CHAmmiT 2017」を通して

本節では，学生コアスタッフ８名の視点から「CHAmmiT2017」を通じて感じたこと，今後の展望について記す。

4－1　松永　直樹（日本大学法学部政治経済学科３年・CHAmmiT2017　学生スタッフ 企画・運営担当代表）

私は今年度で「CHAmmiT」の参加は２回目である。しかも，全てスタッフとしての参加である。昨年度は学生スタッフとして参加をした。そのきっかけは学部から来たメールである。私は所属する法学部で「キャンパススタッフ」というオープンキャンパスのサポートを行なうスタッフをしていた。その縁で学部から「CHAmmiT」の学生スタッフに関するお話をいただいたのである。私はこの企画の趣旨を知らずに，その時は「なんとなく」という気持ちで参加してみた。10月上旬の第１回ミーティング。市ヶ谷の本部に行った私は他学部の圧倒的なアウェー感を感じていた。しかし，その時に法学部の先輩２名がコアスタッフでいらっしゃった。そのことで私の気持ちは落ち着いた。その後もミーティングを重ねながら当日を迎えた。昨年度は法学部での実施だった。普段慣れた校舎だったので，何も気にすることなく参加できた。普段は交流することがない，スポーツ科学部，薬学部や芸術学部などの他学部の方々と積極的な意見交換ができたことが何よりもの収穫だった。

前述の経験より，２年目である今年度もスタッフとして参画したいと思った。そして５月，「CHAmmiT」のスタッフの募集をみて，私は何の迷いもなく応募した。さらに，今年度はコアスタッフとして参加することにした。その理由は，自分の手で「CHAmmiT」を作りたかったということと，前年度お世話になった法学部の先輩の後を継ぎ，その先輩方に恩返しをしたかったということである。夏合宿では普段よりも多くの時間をかけて，今年のテーマを決めたり，夜は懇親会でスタッフや先生，そして職員さんとの仲を深めた。その合宿の最後で，広報係に就いた。広報係としての使命を果たすため，「CHAmmiT」の知名度を高めようとした。前年度 Twitter のカウントダウン企画が途中で終わっていたので，今年度は何としても続けようと思い，結果，ほぼ最後まで行うことができた。その他，広報係の学生スタッフ仲間から，様々な意見をもらい，試行錯誤した末，当日まで様々なコンテンツを生み出すことができた。しかしながら，一つだけ残念なことがある。それは当日参加した法学部の同級生から，「たぶん，Twitter の知名度が低い」と言われたことである。もし，もう一度スタッフとして，かつ広報係に参画できたら，もう少し Twitter の知名度を上げることに取り組みたい。この様な学部間をまたいでの仲間との関係を築いたりしてみたいと思うのであれば，「CHAmmiT」に参加してみてはどうだろうか。

４－２　石田　大悟（日本大学国際関係学部国際総合政策学科３年・CHAmmiT2017 学生スタッフ 企画・運営担当）

私は2017年「学生ＦＤ CHAmmiT」に学生ＦＤ活動についての事前知識をまったく持たずに参加した。第１回ミーティングの際，５回目の開催ということもあり，各々が意気込みを述べており，場違いなのではと不安に思ったことを覚えている。

しかし，回数を重ね学生コアスタッフとのコミュニケーションが取れてきたころ，「自分にも何かできることがあるのではないか」と考えるようになった。何も知らず，初参加での学生コアスタッフという点を生かし，「ほかの学生スタッフにはない観点から考えることができるのではないか」と考え，それを実行した。合宿では，基本的なＦＤの知識なども教えていただき，懇親会にも参加でき知見を広めることができた。

第５回目の開催であり，今回の成果を形に残すこととなりティーチングガイドの改善という明確な目標，教員，職員，学生での互いに対する意見交換を行うというしゃべり場の方法も確立された。

学生コアスタッフ，職員，教員全員で形にしてきたが，大変厳しく，困難なものだった。これまでの４年間の経験をもってすら厳しいものとなったが，すべて終わったときの達成感は何物にも代えられないもののように感じた。自分にできることは少なかったが，私のような学生がコアスタッフとして参加したことで，この日本大学全学ＦＤ活動に刺激を与えることができていれば，と勝手に考えている。私の在学する国際関係学部では，来年度からの学部での学生ＦＤ活動について，教員，職員，学生で話すことができ，順調に行けば活動することも可能なようだ。今回の目玉であった「教・職・学」改造計画を，ほんの僅かかもしれませんが達成できた気がした。

最後になったが，日本大学をより良い大学にしたいと考える学生がこんなにも多く居て，一緒に検討してくださる教員，職員の皆さんが居ること，私は今年参加するまで全く知らなかったし，恥ずかしいとさえ思った。今後の「CHAmmiT」ではこれまでの５年間の活動の中で気づかなかった点に着目し，「より良い日本大学」，「よりよいCHAmmiT」になっていくよう願っている。

４－３　須佐　史子（日本大学通信教育部法律学科３年・CHAmmiT2017 学生スタッフ 企画・運営担当）

今回初めて学生ＦＤ活動参加。３年になって初めて「CHAmmiT」の存在を知り，全貌もよくわからないまま学生コアスタッフに応募。ありがたいことに学生コアスタッフとして選任され，７月から本格的に学生スタッフとして始動したものの，学生ＦＤ活動という全貌を把握することは難しかった。しかし，仲間の意識が高いことと，経験者のサポートもあり，少しずつではあるがＦＤとは何なのか，何のためにあるのかを初心者ながらに試行錯誤しながら模索していった。

夏季に行われた合宿では，企画の要となるテーマをより現実化させ，１年生のためのガイドブックを作成できたらいいのでは，という案から，学生目線で作る「Teaching Guide」を作成することを決定した。しかし，なかなか難しいテーマであることから，学生コアスタッフ全員の認識が一致するまでに相当な時間を要したように感じる。

私の中で特に学生ＦＤ活動の理解が深まったものとして，金沢星稜大学で行われた「学生ＦＤサミット2016夏」が挙げられる。２日にかけて行われるスケジュールであったが想像以上に忙しなく，目まぐるしい２日間であった。しゃべり場の盛り上がりや，ファシリテーターがどれだけ重要なのかを身を持って体験することができ，大変貴重な経験となった。

その他に本学の全学ＦＤワークショップ2017，桜美林大学でのＦＤイベントへの参加等，様々な機会に恵まれ，理解を深めることができた。とくに，全学ＦＤワークショップでは初めての学生の見学・参加ということもあり，大変貴重な体験ができた。

当日までの準備では，資料作成班として活動。沢山の人と連携しながら作業を進めた。仕事量の配分が難

しく，特定の人員への負担の比重が圧倒的に重くなってしまう状況となってしまったので，協力し合いながら作り上げるということに重きを置き，時間の余裕を持てるようにすることの重要さを痛感した。

当日は，しゃべり場が４回あることや，テーマの大きさから不安もあったが，切符を配布して駅を移動してもらうといったユニークな設定も生きており，しゃべり場の様子もにぎやかでとても良かった。気になった点としては，教室のグループ配置で学生・職員・教員と分けた際に教室によって温度差が見られたので，改善の余地がある。

「CHAmmiT」の学生コアスタッフとして活動した半年間でたくさんのことを学び，たくさんの人との出会いによって，より一層日本大学の教育を知り，深く考えるようになった。そして，同じ意識の仲間がたくさんいるからこその心強さを身を持って体感した。私が「CHAmmiT」で得られた知識，経験を今後どう生かしていくべきなのか，どう伝えていくべきかを模索しながら，多くの人たちの意識に介入できる方法を見つけるためにも，試行錯誤を重ねていくことが今後の課題である。

４－４　大村　一希（日本大学文理学部地球科学科２年･CHAmmiT2017 学生スタッフ 広報･資料担当代表）

私が今回学生コアスタッフとしての参加を決意した理由は２つある。１つ目は文理学部で行っている学生ＦＤ活動が抱えている課題に対して何か打開策はないだろうかという新しい知見を得るためである。２つ目は普段かかわる事ができない大学職員がやっていることに興味を持ったからである。文理学部の学生ＦＤのメンバーとして日大の職員とかかわっていても職務や人間性について知りえなかった。そのため，少しでも職員のことについて知りえるよう今回私が学生コアスタッフに応募した。

今年の「CHAmmiT」は第５回という一つの節目ということもあり今までの「CHAmmiT」と一味違うものを求められ，正直僕には荷が重すぎたように感じた。改革，改革…頭の中でその単語がグルグル回るばかりで，やりたいことはたくさんあるのですが現実との兼ね合いを考えるとなかなか思いつくものがあげられなかった。教員や職員の方々から様々なアドバイスをいただき，その時が一番教職学の三位一体を感じられたような気がする。今回のプロジェクトに賛同した理由は，今まで学生の意識改善しか取り上げることが難しかった学生ＦＤが「日本大学ＦＤガイドブック Teaching Guide」を通してやっと教員方に意見を出せるということが自分の中でも新しいＦＤ活動の１つになると考えたためである。学生スタッフとのミーティングが始まってからはできる限り全体の把握に努めようとしたが自分の理解力のなさとミーティング回数が少なくなかなか理解に及ぶことができなかった。

もちろん参加者から出された意見は今後文理学部のＦＤでもできる限り生かしていきたいと思う。それ以外にも本番前の練習でもとても面白い意見が出され本番前に引き締まることができた。また，力及ばず理解が足りなかったことに関して，懇親の場を重ねることによりそれぞれのやりたいことや目標が見え，より的確な相談をしやすくなった。仕事においてもお互いの理解のすれ違いを埋めるためにも仲を深めていくことが大切だと感じた。最後にここで出会えた仲間というのはやはりこのイベントの醍醐味でもあって新しい考え方を得られたというのはとても良かったと思う。

４－５　池田　和徳（日本大学芸術学部美術学科４年・CHAmmiT2017 学生スタッフ 広報・資料担当）

昨年は推薦スタッフとして，今年はコアスタッフとして参加した。

どちらも，経験した上で言えるのは，学生コアスタッフはとても大変だということ。企画から宣伝まで全部自分達で決めていくため，その責任の大部分は学生コアスタッフにあると言っても過言ではない。本当にプレッシャーが大きく大変だった。だからこそ，達成感はとてもある。実際に，日大の教員や職員，学生が一か所に集まって「CHAmmiT」をやっているのを見て，「本当に，凄く大きなことをしているんだ！自分はそれに携わっているんだ！」という実感が湧いてきた。そして，このＦＤは今後も絶対に続けていくべき

イベントだとも思った。

自分に何ができるか考えた時,「FDを広めるためのシンボルキャラクターを作ることだ」と思った。そして生まれたのが,「フラワードッグくん」と「CHAmmiT ちゃん」である。

フラワードッグくんは，昨年推薦スタッフとして参加したときに作った。

FDという頭文字から連想したキャラクター。本学で開催した「学生FDサミット 2016」で掲げた教･職･学のテーマカラーは赤青黄色だったため，この三色のカラーのみで着色をした。また，FDが教育をもっと改善していくという目的から，教育に花を咲かせるという意味で，頭に芽を付けた。

CHAmmiT ちゃんは，今年５周年という区切りの年でもあるので記念として，新しく作ったキャラクターだ。「CHAmmiT」の大文字を取ると，フランス語で猫になる。だから，ネコの女の子にしてみた。カラーは，今年のテーマカラーである，赤をメインに着色。

自分の考えたキャラクター達が，冊子に載ったり，大きな講堂の壁に大きく印刷されて張り出されているのを見て，僕としては，すごく感動をした。それを見た時，自分が作ったものが，認められたんだという達成感があった。しかし，一つの不安が頭をよぎった。

それは，来年以降，自分が携われないため，キャラクターが廃れてしまうのではないかという不安。ポスターなども，以前のように外注で作るという味気ないものになるのではないかという心配もある。

そこで，考えたのが,「キャラクターをどう使っていけばいいか，誰が引き継いでも新しく更新できるようなガイドブックを作ろう」と思った。そうすれば僕がいなくても，常に新しいフラワードックくん，CHAmmiT ちゃんが生み出されて，ずっとFDが続く限り残っていくのではないか，という考えにたどりついた。そして，同じように，ポスターの作り方もガイドブックにしようと考えた。

…すると，面白いことに，同じ学生コアスタッフの太田くんが僕と同じことを考えていて，この５年間で経験したことを元にどうすれば今後FDを進めていけるのかというガイドブックを作っていることを知った。やはり，形は違えど，学校をよくしていこうという思いは皆一緒なのだと実感した。

今年の「CHAmmiT」は新しい試みが多くて沢山失敗もしたが，良いメンバーにめぐりあえて，本当によかった。

今後，僕達がいなくなってもFDが続いて，教育をよくしていこうという人達が出てくることを願っている。

４－６　齋藤　剛熙（日本大学医学部医学科３年・CHAmmiT2017 学生スタッフ 広報・資料担当）

この度初めてコアスタッフをやらせていただいた上で学んだこと，感じたことは数多くあるがまずは反省から入りたいと思う。前回はしゃべり場の担当であったのに対し，今回はオープニング・エンディングの担当であったがほとんどの仕事を総務である太田翔さん並びに他の班員に任せてしまったことが一つ目の反省としてあげられる。僕は以前から何でも自分一人でやり過ぎてしまうという癖があり周りからは「周りをもっとうまく使えるようになれ」と言われていたため実行しようとした結果，ただ周りにやらせて自分は何もしない状況になってしまった。しかし周りを使おうとしたことは事実であるのであまり悲観的にとらえず今回の反省を今後に生かしたい。またコアスタッフ，オープニング・エンディング班の皆さん，その他スタッフの方にはこの場を借りてお礼とお詫びを申し上げたい。

次に今回のチャミット全体を通して得たものについて話そうと思う。先ほどは何もしていないと言っていた手前言いにくいのだが，コアスタッフをやるに当たって自分なりに今まで以上にFD活動およびチャミットについて深く考える時間が増えた。これにより単純に知識量が増え，世界が広がった。具体的には医学部のFD活動に関してこれまでは「カリキュラムがほかの学部に比べて綿密に組まれていて新しい内容や改革を起こすのは正直不可能で考えることに意味がない」と思っていた。しかしこの考えは「FD＝新しい授業

を取り入れる事のみである」という考えが恥ずかしながら自分の中にあったことにより生まれていた発想である。要するに新しい授業を作らなければ意味がないと思っていたとも言える。しかしそうではなくもっと細かいものたとえば「授業の質，教授・講師の先生方の質，職員の対応，環境設備などの変化」の方が新しい授業を作ることより断然強い影響を及ぼすことに気が付いた。そう考えるとカリキュラムに変更の余地が少ない医学部にもまだまだ改善の兆しがあることがわかった。ほかのコアスタッフに言ったら馬鹿にされてしまうかもしれないが，これが私の一番の収穫である。

最後にもっと具体的な収穫について記す。私は今回のチャミットで職員のみの班のファシリテーターを務めさせていただいたがその際に学生では出てこないような具体的な政策案や裏事情，若い職員とベテランの職員の意見の共通点と相違点などを詳しく聞かせていただいた。これだけでも大きな収穫なのだが議論の最中や終わった後などに「ほんとに話させるのも上手だし，進行もスムーズですごい議論がしやすかった」などのお褒めの言葉をいただき，これまでのファシリテーションの経験が学生だけでなく社会人の方々に認められたことが個人的にさらに大きな収穫であった。

４－７　太田　翔（日本大学商学部会計学科４年・CHAmmiT2017 学生スタッフ 総務担当）

「CHAmmiT」の学生コアスタッフとして参加するのは，３年目だった。

参加し始めのころから，いつも「何で自分はコアスタッフになったのだろう？」と思う。この疑問が頭に思い浮かぶのは，初心者のころから経験者になった昨年や今年も変わらなかった。実に不思議である。

しかし，「CHAmmiT」当日を迎えると思い知ることになる。「『CHAmmiT』は楽しい」。と。短絡的な言葉で表してしまい，申し訳ないが，本当に，とにかく楽しいのである。日本大学の全学部の学生，教員，職員が同じテーブルに集まり，立場など関係なく，同じ方向を向いて話している。この光景は，３年経っても感動する。やはり，「CHAmmiT」は，それ自体に意義があり，今後も継続すべき日本大学の誇るべきイベントであると，３年経験したからこそ，私は思う。

今年の「CHAmmiT」は，日本大学ＦＤ推進センターが発行している「日本大学ＦＤガイドブック Teaching Guide」の一部に参加者の意見を反映させるという，学生コアスタッフの狙いがあった。これは，過去の「CHAmmiT」の課題であり，広く「学生ＦＤ活動」においても課題とされている，“実際の学びの場への還元”に繋がる大きな一歩であると感じる。私自身，多くの方に「CHAmmiT」を通して，考えていただいた貴重な意見を活用する場がないことについて悔しく思っていた。参加者の声を形として残すことができ，なおかつ教員に届けることができるこの一連の枠組みは，日本大学の学生参画型ＦＤに新たな兆しを招くことになるだろう。今後，このような結びのある「CHAmmiT」へと発展していくことを期待する。

学生コアスタッフを務め，得たことは，数え切れないほどある。自身の学部だけでは経験できないことを，沢山経験することができた。多くの価値観に触れることや人と意見を交わすことは，私の学生生活を豊かにしてくれた。そして何より，多くの熱い意志をもった仲間を得ることができた。これらのかけがえのないものを与えてくれた「CHAmmiT」には，感謝してもしきれない。

学生参画型ＦＤ活動および「CHAmmiT」には，様々な課題がある。組織の連携，活動の継続，スタッフ間の意欲の違いなどである。これらを解決することは，非常に難しい。そもそも無理やりに解決する必要があるのかどうかさえ，私には分からない。今後，学生スタッフを務めるみなさんも，多くの事を考えながら，楽しんで「CHAmmiT」を進めてほしいと願っている。

４－８　坂本　裕菜（日本大学生産工学部応用分子化学科３年 CHAmmiT2017 学生スタッフ 代表）

CHAmmiT の参加３回目にして代表という大役を務めさせていただいたこと，大変光栄に思う。ＦＤについて全く知識のなかった私が，教員の方に誘われなんとなく参加した文理学部で開催された「学生ＦＤサ

ミット」をきっかけに学生ＦＤに入り込んでいったのは，あまりにも自然な流れで，私自身，代表が決まった時にすんなりと奥深くまで入り込んでいるなと驚いた。学生の力で何かが変わるという発想がなかったため，学生ＦＤをはじめてからの気づきは私に大きな衝撃を与えるものばかりだった。もちろん私の想像通り，学生だけでは発想はあっても変える力は大きくなく，教職学の三者が協力することで初めて大きな力となると学んだ。具体的には生産工学部に発足した「生産工学部 学生ＦＤ推進プロジェクト」だ。昨年誕生したこの団体は生産工学部での学生ＦＤ活動を活発に行うことを目的としていて，教職員の方のお力なくしては成しえなかったひとつの大きな成果だと言える。

今回の「CHAmmiT2017」では本当に周りの方々に恵まれたと思う。５回目の開催ということで何か形に残るものをと追及してきたわけだが，これを実現させるには強い気持ちだけでなく，実際の手助けが必要になる。また，もちろんそれに見合った強い気持ちも必要にはなるのだが，この点は今回の学生スタッフには心配がなかった。準備段階で遅れや情報共有の甘さなど，迷惑をかける部分は多々あったが，私は代表という立場から，学生スタッフからの熱意を強く感じ取っていた。学生コアスタッフだけでなく学生スタッフも意見出しや共有に反応してくれたため，より完成度の高い企画となった。

今回この活動報告を作成する中で，学生・教員・職員の考えの違いを改めて知ることができた。今まで私が参加してきた「CHAmmiT」ではしゃべり場の中で自分と違う立場の人の価値観に触れることはあったが，話だけで終わっていて実感がなかった部分もあった。しかし，今回のように紙の上に文章として表現することでより明確に考えの違いを知ることができたように感じる。この感覚をぜひ参加者にも感じていてほしいところだ。

私たちの今回の活動が大きな足掛かりとなって学生ＦＤがさらなる発展を遂げることを祈っている。。

お わ り に

初めはみんな初心者で何もわからずスタートするのが「CHAmmiT」のお決まりである。しかし，ひとつひとつ丁寧に意見を絞り出して行くことで，大学教育に真剣に向き合うことができ，また違う立場の人と意見を共有することでそれぞれの中に「気づき」が生まれるのだと思う。スタッフとして参加した学生はもちろんのこと，参加者も「気づき」を得て，意識が変わっただろう。このような場をこれからも残していきたい。

今後の学生ＦＤのさらなる飛躍に期待する。